

エレベーターなし 不安の声

標題は朝日新聞 11 月 17 日の朝刊、「名古屋城 市の方針に車いす利用者」とある。リードから一名古屋市は 16 日、2022 年末完成を目指す名古屋城の木造新天守にエレベーターを設置しない方針を有識者会議で示した。代わりに階段に椅子付きのリフトを付け、障害者や高齢者に配慮する。史実に忠実な復元を優先するため。有識者から異論は出なかったが、傍聴した車いす利用者は不安の声を漏らした。

現在の鉄筋コンクリート製の天守は 1959 年に再建され、5 階までエレベーターで移動できる。しかし、市は名古屋城の「本質的価値を高める」として、木造化に伝統的な材料や工法を採用する方針。江戸期の姿を忠実に復元するため、エレベーターを設けない方針を決めた。



代わりに、5 階までの階段に椅子付きのリフトを設け、そのためのレールを付ける。安全確保のため、使用時は階段を片側通行や通行止めにする考えだ。市は「全ての来場者が公平かつ快適に利用できるよう、障害者や高齢者らに配慮したユニバーサルデザインを導入する」とリフト導入の意義を説明する。

ただ、有識者会議を傍聴した名古屋市昭和区の男性(30)はエレベーターを望んでいる。脳性まひで体が不自由で、電動車いすが欠かせない。リフトについて「自分は何とか乗れるが、筋力が弱い人は乗れない」と指摘。エレベーターなら、自分の車いすで天守内を動けるので安心という。

市内の障害者団体は 7 月、木造天守にエレベーターを設置するよう要望。障害者らの意見を聞く機会を設けることも求めている。

記事を紹介したのは、名古屋市のエレベーターを設置しない「方針」なるものに疑問を感じたからだ。記事の「情報」をもとに、3 点だけ指摘しておきたい。

第 1 に、障害者の実態をどれだけ把握しているのか。「全ての来場者が公平かつ快適に利用できるよう」としているが、たとえば人工呼吸器を付けた、知り合いの小学生はリフトに乗れない。最初から「排除」されるのだ。行政による「排除」である。

第 2 に、名古屋城の「本質的価値を高める」というが、椅子付きのリフトではなく、エレベーターでは、なぜいけないのか。リフト設置が代替案なら、「現代」という時代を反映したエレベーターがなぜ拒否されるのか、理解に苦しむ。

第 3 に、そもそも名古屋城「木造化ありき」への疑問である。それも拙速なやり方だ。書きだすと長くなるので、問題だけ指摘しておくことにしよう。

(2017 年 11 月 21 日)